２０１１．１０．１６
於　神戸大学氷ノ山千本杉ヒュッテ

氷ノ山千本杉ヒュッテ建設の経緯

―昭和３０年代　その時代と山岳部―

神戸大学山岳会　岡市敏治

私は神戸大学山岳会会員の岡市敏治でございます。氷ノ山千本杉ヒュッテができた昭和３６年当時、私は山岳部の３年生、ちょうど２０才でありました。
「ヤブ山からヒマラヤへ」それがその頃の山岳部の合言葉であります。氷ノ山をホームゲレンデとして、いくたの若者がヒマラヤへ出かけました。そして私もその一人となったのです。
それから茫々５０年の歳月が流れ、当時の若者は古希を迎えています。
それでは、この小屋が出来た当時の時代背景から話を始めたいと思います。

『坂の上の雲』の時代

この前年の昭和３５年は６０年安保の年で、日本列島全体が騒然としていました。「アンポ反対」で大学は閉鎖され、学生も教官も街へデモにくり出しました。日本中に大変なエネルギーが満ちあふれていたのです。
このエネルギーは安保の挫折で、一転わが国の経済成長へと向かっていきます。３年後には新幹線が開通し、東京オリンピックが開催され、わが国は世界史上の奇跡といわれた高度経済成長へと邁進していきます。思えば「坂の上の一朶の雲」を目指すまことに楽天的で幸福な時代でありました。

パタゴニア探検

さて、この頃山岳部はなにをしていたのでしょうか。３年前の昭和３３年、神戸大学は日本、チリ合同パタゴニア探検隊を組織し、パタゴニア、アレナレス峰の初登頂に成功します。これは外国と合同で行う戦後最大規模の探検隊でありました。これを記録した高木正孝著『パタゴニア探検記』は岩波書店で４０年にわたるロングセラーとなりました。
この隊を企画し、実行したのがわが山岳部、山岳会であります。そして、日本の大学探検史に燦然と輝く金字塔を打ち立てたのであります。
しかし南米チリでパタゴニア、アレナレス峰初登頂に沸いていたまさにその時、地球の裏側の日本では、大変な悲劇が発生していました。
その年の昭和３３年の山岳部現役春山合宿は穂高で行われていましたが、滝谷クラック尾根において、山岳部２年生部員２名が滑落、遭難死したのです。

多発する遭難

パタゴニアの栄光は吹っ飛んでしまいました。この遭難は偶然のたまたまの悲劇では

ないのではないかという深刻な反省が山岳部でなされました。というのもわが山岳部は昭和　２５年以降の８年間でこの滝谷を含め５件の遭難事故を起こし、７名もの犠牲者を出していたのです。

遭難多発の原因はなにか。そのためには当時の登山界の状況を説明しなければなりません。昭和３１年、日本隊のマナスル初登頂によってわが国は国をあげての空前の登山ブームに突入します。

空前の登山ブーム

登山者は雪と岩とお花畑のある北アルプスの穂高や立山、剱、白馬岳に集中しました。北アルプス有名山岳の山小屋は悲惨で、芋の子を洗うような大混雑です。剱岳の頂上は赤さびた空き缶で埋め尽くされてしまいました。山岳部にも２０名以上の新入部員が押しかけ、多い時には部員５０名にもなり、夏山合宿のテントに入りきらない有様です。

この一大登山ブームは初歩的な遭難を多発させました。日本人はどうしてこうもブームに弱いのでしょう。ここで心理学者でもある山岳部長の高木正孝先生、チャカさんに登場してもらわなければなりません。

高木アルピニズム

高木先生は戦中戦後の９年間をヨーロッパで過ごし、日本人で唯一人アルプスガイドの免許をもった当時世界第一級のアルピニストにして、新進気鋭の社会心理学者でありました。

昭和３０年代、人々は夏山だけでなく、雪山へも列をなして出かけました。日本アルプス著名山岳の雪の登路は踏み固められ、好天にさえ恵まれれば、ドライヴウェイを行くように簡単に３０００mの雪の山頂まで登れます。踏み跡を一歩踏み外すと腰までもぐるラッセルだというのにです。このようなラクラク登山を続けておれば、地図を読む力もラッセルする体力も養えません。そしてひとたび吹雪となれば、ルートを見失い、いとも簡単に遭難してしまうのです。

穂高や剱の岩登りでもあらかじめルート図を予習し、次のハーケンを探しながらの岩登りとなります。これでは未知の岩峯を登るルートファインディングの力はつきません。

クラシカル登山へ

高木先生はこう言います。「剱だ、穂高だ、ハーケンだとバスや人にもまれて楽しく登ってこい。だがお前たちの山だけがモダン登山だけがこの世界ではないのだ。このわしら老人たちの山、踏み跡もないハーケンの痕跡もない昔の山もまた山なのだ。いやそれこそが本物の山かもしれんぞ。昔の山といったところで今の時代でも、名も知れぬそして低い山々の中に、お前たちの鼻っ先に昔の山はあるのだ。」

「だが注意しろ。お前たちはルートやハーケンの完備した剱や穂高に登れようとも、わずか１５００mの氷ノ山一つ登れはしないことを。ルート図やハーケンのないクラシカルな山々を知ってこそ、お前たちは大した登山家になれるんだ。世界を広く知るのだ。そして始めてヒマラヤへの道も拓けてくるのだ。」と。

山岳部はチャカさんのこの言葉に目を覚ます。そして人のあまり行かない昔のままの山、クラシカル登山へと登山理念を転換するのです。

さて、ここで氷ノ山の登場となります。当時の私たちには氷ノ山は単なるヤブ山としか思えなかった。それがクラシカル登山という視点で見ると一転、宝の山のように見えてくるではありませんか。

氷ノ山千本杉への道

ところで、氷ノ山千本杉ヒュッテ建設のきっかけはどうだったのでしょう。昭和３６年２月、氷ノ山山麓丹戸村の氷ノ山の主ともいえる中村建治さんから「大阪のアルコウ会が会所有の千本杉ヒュッテを無償で譲ってよい」といっているという情報が当山岳会にもたらされました。それがコトの発端であります。氷ノ山は、兵庫県一番の高山（1510m）でありながら交通が不便で登山者はあまり訪れない。冬は名だたる豪雪地帯で冬山としては手強い相手です。これはクラシカル登山の最適のゲレンデではないか。話はとんとん拍子に進み、夏山合宿が終わると私たち現役部員は建設工事の為に氷ノ山に入ることになりました。アルコウ会の旧ヒュッテは基礎まで腐っており、一から建て直さねばならなかったのです。

ヒュッテ建設地整地作業

昭和３６年８月、小屋建設作業の第一陣として、今日ここにきております同期の田中信さん、小谷 Betta さん、壺阪らと共に私も氷ノ山に登りました。建設予定地は旧ヒュッテより１００m南へ下った斜面地です。つまり私たちが今いるこの場所であります。ここなら四季を通じ、沢水を自然流下で導水できるということで、千本杉ヒュッテ生みの親ともいうべき中村建治さんが最適地として決定されました。

身の丈以上あるチシマ笹を鎌で薙ぎ倒して工事用カマボコテントを張り、残暑の中ブヨに悩まされながら整地作業に汗を流したことを昨日のことのように覚えています。

昭和３６年１２月竣工式

建材の材木はここ千本杉に生えている天然の杉を姫路営林署から払い下げてもらうことが出来ました。現役の大工さんでもある中村建治さんが右手薬指を切断するという事故に見舞われながらも杉を伐採、製材して建てた総天然杉造りの小屋です。ここ千本杉一帯は昭和５０年に県の天然記念物に指定されたので、ここの杉で再び小屋を建てるということは今後できません。大変貴重な小屋であります。

冬は２階まで雪が積もる過酷な豪雪の高所（１３４０m）で、この小屋が５０年の風雪に耐えたということは、いかに中村建治さんの大工としての匠の技が卓越していたかということを証明するものですが、また同時に雪に強い貴重な天然杉を材木にすることが出来たという幸運も大きいのであります。

外壁の塗装工事のために、私は尼崎のペイントメーカーに塗料をもらいに行きました。その縁で私はその会社に就職することになります。私の会社人生のスタートは千本杉ヒュッテが引き金となったのであります。

工事期間を通じての山岳部員の動員人数は延べ４５０名、総工費１００万円で、小屋は何とか初雪の来るまでに完成、昭和３６年１２月１０日に現地で盛大な竣工式が行われました。

「山は自分を教育する道場だ」

積雪の中、大学関係者、地元関係者、山岳部員、ＯＢら５２名もの多くが雪のヒュッテに参列しました。

この竣工式には高木先生の姿もありましたが、先生はこの８カ月後に南太平洋に学術調査に行かれ、昭和３７年８月６日、ファッヒバ島沖合で消息を絶たれました。

次のメッセージが高木先生の最後の言葉となりました。

「山岳部の現役たちは、氷ノ山山小屋建設にすべてを捧げたその熱情のうちに知らず知らずに昔の山、クラシカル登山にぶつかっていたのではないだろうか。山は立派な人間を自分自身で教育する道場だ。」

高木先生亡き後の半世紀、山岳部は代々すぐれた部長に恵まれました。それは川上太郎法学部教授であり、西村勝比古教養部教授であり、そして平井一正工学部教授と乙藤洋一郎理学部教授であります。

氷ノ山と中西先生

しかし氷ノ山とのかかわりで申すならば、植物生態学者、中西哲教育学部教授を歴代山岳部長の第一にあげなければなりません。小屋が竣工して半年後の昭和３７年６月、大学では山岳部員や一般学生も加えて、氷ノ山へバスツアーをすることになり、当時学生部長だった西村先生の要請をうけて氷ノ山の植物について、現地指導されたのが中西先生であります。

この縁で先生は翌３８年の現役による神戸大学台湾山岳学術調査隊の副隊長（植物学担当）をつとめられました。隊長は氷河学の田中薫名誉教授で、私は両先生の助手として参加しました。

ユーコンからクーラカンリ

昭和４３年には中西先生を隊長として、神戸大学ユーコン学術調査隊が派遣されます。最年少の現役隊員が井上達男現山岳会会長であります。

私は昭和６１年神戸大学チベット学術登山隊の登山隊長として、チベット・ヒマラヤに挑みます。現山岳部長の乙藤教授も司会の山田健会員も次に講演いただく武田義明教授もその時の学術隊員であります。さらには、そこにおります緒方俊治会員は登攀隊長としてクーラカンリ（７５５４m）初登頂の最大の立役者となりました。

そしてこの遠征隊の実行委員長が中西先生であります。先生はその時すでに不治の病に犯されておられましたが、にもかかわらず遠征資金１億円の募金実現に尽力されました。ついには１億円を集めることが出来ましたが、ために憔悴され、そして私たちがクーラカンリ初登頂を果たし、無事帰国するのを待って、それで安心したかのように天国へ召されてしまわれたのであります。

中西先生追悼登山

先生が逝かれた翌年の昭和６２年５月、氷ノ山で先生の追悼登山をやろうということになりました。先生には氷ノ山が最もふさわしいと誰もが考えたのです。台湾やユーコン、クーラカンリの隊員とその家族を中心に３０名がここ千本杉ヒュッテに集まりました。

中西先生の奥さまにもご参加頂き、皆でこの小屋に一泊したのです。小学２年生の可

愛い女の子も来ていました。ユーコン井上隊員の長女であります。私は中学一年の長男をともなっていました。

そして、ここから新しい物語が始まります。この二人、まだ幼い少女といがぐり頭の少年は、その後多治見と大阪で別々の人生を送ります。それぞれ東大と京大を卒業しますが、途方もない苦難にも遭遇します。そしてこの２０年後、まさに２０年後に京都大原の山小屋で再会を果たすのです。二人は２８歳の美しい娘と３３歳の優しい青年に成長していました。やがて二人の間に恋が芽生えます。そしてその１年後、二人は結婚するのです。今から２年前の話であります。

山と人

この千本杉ヒュッテは、私の会社人生を決定したのみならず、私の家族の人生をも運命的なものにし、しかる後幸福をもたらしました。

私たち山岳部の機関誌の名前は『山と人』といいます。山と人、これはどのようなエニシ（縁）によってつながっているのでしょう。山岳部に入ったこと、氷ノ山とその山小屋建設、そしてヒマラヤ遠征、中西先生との出会いと別れ……。人生においてわが身に起こることでむだなことなど何一つないのではないか、そういう人生の不思議に思いを致さずにはおられません。

私にしてかくの如きでありますから、この小屋と山にかかわってきた人々は、その後それぞれの人生の起伏を生き、さまざまな人生の物語を紡いでこられたに違いありません。そして山での体験と人とのきずなが苦しい時にはきっと背中を押してくれたことでしょう。

若い世代へ

先ほどの学長先生祝詞にありましたように、「青春時代の多感な時期に、山小屋に宿泊して、静かに自然と自分を見つめることは大変貴重なこと」であります。そしてそれがその後の人生の飛躍のきっかけになるやも知れません。高木先生のことばを再度引用させてもらうなら、「山は立派な人間を自分自身で教育する道場」なのであります。

５０年の風雪に耐えたこの千本杉ヒュッテと武田則明会員設計のこの素敵なテラスが、神戸大学の学生、ＯＢのみならず、多くの登山者によって今後も利用され、それぞれの人生の道場となり、それぞれの幸福が実現されんことを祈念いたしまして、私の報告とさせていただきます。

（了）